

事業名称	美術館のアクセシビリティ向上推進事業		
実行委員会	美術館のアクセシビリティ向上推進事業		
中核館	三重県立美術館		
	住所	〒514-0007 三重県津市大谷町11番地	
	TEL	059-227-2100 (代表)	FAX 059-223-0570
	ホームページ	<a href="https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/">https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/</a>	
構成団体	公益財団法人三重県文化振興事業団、三重県子ども・福祉部障がい福祉課、 三重県立美術館ボランティア「櫂の会」		
事業開始時点の課題分析	<p>三重県立美術館は、2018年3月に策定した「美術館のめざすこと」において、「誰もが利用しやすい環境を整えます」を指針の1つに掲げている。その一方で、利用者からは施設の利用しづらさや、展示についての配慮不足を指摘する声が継続的に挙がっていたため、2020年度に「美術館のアクセシビリティ(=利用しやすさ)向上推進事業」に着手した。本事業において当事者や当事者家族と意見を交わすなかで、美術館の入口へのアクセスや、展示室への入場方法(障害者手帳の提示方法等)にも大きな課題があることが明らかとなった。学習プログラムや展示を充実させるのみならず、来館から退館まで、さらにはウェブサイト閲覧等も含めて「美術館利用」を広く捉え、総合的に利用者の美術館体験の質を向上させる必要があると考えられる。そのためには、来館者の美術館体験に大きな影響を及ぼす、彼らを取り巻く人々(館内のスタッフや他の来館者)ともこれらの理念を共有する必要があるだろう。</p> <p>また、2020年に社会を襲ったコロナ禍は、障がいの有無にかかわらず多くの人の美術館へのアクセス権を奪う結果となった。オンラインプログラムが短期間で一気に普及したが、オンライン化に伴い新たに排除された利用者の存在も無視すべきでない。</p>		
事業目的	<p>当事業では前年度に引き続き、美術館アクセスに困難を抱える人々との協働によって、課題解決に取り組み、美術館の利用しやすさを向上させることを目的とする。</p> <p>本事業は、アクセスしやすい展示や学習プログラムの運営にとどまらず、美術館体験全体の質的向上に努めるとともに、いわゆる「当事者」に限定されないさまざまな人々にアクセシビリティについて学習する機会を提供する。</p> <p>さらに、困難な時代にあるからこそ、社会状況に敏感に反応し、さまざまな組織・個人と連携しながら、失われたアクセス権の回復手段や、代替手段も柔軟に検討していく。</p>		
事業概要	<p>上記の目的を達成するために、本事業では、</p> <p>①美術館を利用しづらい人々との対話により、彼らの意見を収集し、</p> <p>②障がいのある人に限らず、さまざまな人にアクセシビリティについて考える機会を提供し、</p> <p>③利用しづらい人のアクセシビリティを向上させるために、彼らから収集した意見に基づいて、デザイナーや事業者と協働してさまざまなツール、コンテンツを製作、</p> <p>④①-③の事業の成果は報告書類を通して広く共有した。</p>		

<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>1. 美術館のアクセシビリティ向上推進事業 (1) アクセシビリティ向上</p> <p>①利用者（障がいのある当事者等）、未利用者の調査（利用者調査）</p> <p>②学習プログラム（参加型のイベント）の企画・運営（プログラム）</p> <p>③オンラインリソース、音声ガイド、配布印刷物、掲示物等ツールの開発（ツール開発）</p> <p>④事業成果の報告・共有（成果報告）</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>①利用者・未利用者の調査 三重県庁の e-モニター制度を利用し、計 820 名の利用者・未利用者に認知度調査・意識調査を行った。また、アクセシブルな所蔵品展「美術にアクセス！」展の来場者（障がいのある当事者を含む）や、その他プログラムの参加者から聞き取り、アンケート調査を行った。</p> <p>②学習プログラムの企画運営 障がいのある人を講師と参加者に含むオンラインプログラムを 2 回実施し、オフラインで遠隔地から参加できるハガキ投函プログラムも 1 種実施。学芸員によるレクチャーは対面で 2 回、オンラインで 1 回実施。知的障がいや発達障がいのある人、子どもでも参加しやすい対面の創作プログラムを 4 回実施し、コロナ禍下の移動難を受けて講演会のアーカイブ映像配信（字幕付き）も 1 回行った。</p> <p>③ツール開発 前年度に障がいのある当事者から受けた助言をもとに展覧会会場の触地図を制作し、会場掲出パネルを音訳する音声解説も設置した。既存の鑑賞支援ツールや来館支援ツールにも、点訳を加えた。「美術にアクセス！」展の会期中には、配布印刷物に音訳と点訳を完備し、来場者からの助言等に基づいて複数回展示改善（ツール設置方法の改善）も行った。</p> <p>④報告書作成 音声コードを載せ、オンライン版も整えた報告書を作成。「美術にアクセス！」展に関しては取材や視察等の依頼が多く、複数の雑誌や外部サイトに多言語で記事も掲載された。</p>

## 【事業実績】 事業実績の詳細については別添の報告書をご確認ください(事業番号や分類は一致していません)。



「美術館のアクセシビリティ向上推進事業」ポータルページ <https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000258912.htm>

### ①利用者・未利用者の調査

#### A. e-モニター調査 (報告書 16 ページ)

三重県が各種の行政課題について事前登録した三重県民を対象に行う電子アンケートシステム「e-モニター制度」を利用し、当館の未利用者を含む 820 人に 9 つの質問をした。県立美術館へ来館したことがない人にその理由を尋ねたところ (415 人、819 回答)、「近くにないから」という回答が最多で (239 人、58%)、次に多い回答が「存在を知らなかったから」で 112 人 (27%) だった。

#### B. 来館者、参加者調査 (報告書 5-9, 12-15, 17 ページ)

誰もが利用しやすい展示を試みた「美術にアクセス!——多感覚鑑賞のすすめ」展 (以下、アクセス展) では、61 件のアンケート回答を得た。各学習プログラム実施後にも、参加者からフィードバックを得た (②参照)。

アクセス展来場者の感想:

- ・視覚障害が進んで来て、美術館をたのしめなくなっていたが、こういう取組をしてもらっているとわかり、うれしく希望がもてた。
- ・私自身が自閉症スペクトラム当事者であり、試みの意味を深く考えさせられた。
- ・障がい者向けの取り組みを紹介する内容とは知らずに来たので、最初は少し驚いたが、いろいろな取り組みを知るうちに、美術への可能性を感じた。

### ②学習プログラム (参加型イベント) の企画・運営 \*主なもののみ紹介

#### A. 「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」 (報告書 12 ページ)

日時: 2021 年 7 月 17 日 (土) 14:00 - 16:30、7 月 18 日 (日) 13:30 - 16:30

方法: オンライン会議システム Zoom による開催

講師: 林建太、浦野盛光、衛藤宏章、濱松若葉 (「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」メンバー)

参加者数: 計 15 名 (17 日 8 名+18 日 7 名) \*応募者数計 63 名 (17 日 28 名+18 日 35 名)

目の見える人、見えない人が進行役を務めながら、作品画像をオンラインで鑑賞し、見えることは見えないこと (印象等) を共有する鑑賞ワークショップ。参加者は見える人が見えない人を支援するという構図の揺らぎを体験した。

参加者の感想:

- ・何よりも平素気づいていなかった自分に気づいたことです。
- ・見えている人が見ている絵を転写するように目の見えない人のイメージに浮かび上がらせるのが目的では無くて、もしかしたら、イメージが全く違っても、その人の中で楽しめるアートが出来上がっていたら、それはそれで楽しいのかなと思いました。

#### B. ワークショップ「あなたとわたしのバランス」

「握る」 日時: 2021 年 6 月 12 日 (土)、7 月 10 日 (土) 14:00-16:00 \*立ち寄り式、所要時間 10 分程度

「バランスをとる」 日時: 2021 年 6 月 13 日 (日)、7 月 11 日 (日) 11:00-12:00、14:00-15:00

講師: 宮田雪乃、金光男 (美術作家)

参加者数: 「握る」 計 51 名 (6 月 12 日 27 名+7 月 10 日 24 名)

「バランスをとる」 計 37 名 (6 月 13 日午前 6 名 午後 10 名+7 月 11 日午前 11 名 午後 10 名)

知的障がいや発達障がい、子ども等、活動の複雑さが参加の障壁となり得る人でも参加しやすいプログラムとして企画。

「握る」では、参加者は油粘土を木の棒に握り付け、名前や年齢、夢をキャプションに書く。「バランスをとる」では、参加者が粘土を握り付けた後に、前日誰かが握った粘土とバランスをとりやじろべえを作成した。

「バランスをとる」参加者の感想：

- ・時節柄、いっしょに作品をつくる。というワークショップはむしろかしいかと思いましたが、知らない誰かとの作品ができて面白いと思いました。
- ・後出しでバランスを取ったり、相手のキャプションと対になるようにと思って考えたりと見えない人[実際には会えない人]との対話が楽しかったです。
- ・コロナの時代にソーシャルディスタンス等、人との色々な距離について考える良いきっかけになった。



撮影：松原豊

### ③オンラインリソース、掲示物等ツールの開発 \*主なもののみ紹介

A. アクセス展会場の触地図、ツール設置台の開発・制作（報告書 5-7 ページ）

触地図デザイン・制作：道田健（大阪芸術大学准教授／プロダクトデザイナー）

主に目の見えない／見えにくい人の利便性向上を目的として、当事者の意見を反映させたり、アクセシブルな展示デザインのガイドラインを参照させたりしながら、触地図や、触図等ツールを設置する台を製作・設置した。触地図はとりわけ目の見えない人と連れ立って来館する目の見える人から、案内がしやすいと好評を得た。

B. プログラムの記録動画公開（報告書 17 ページ）

公開期間：2022年2月21日（月）－3月21日（月・祝）

撮影・編集：三重県立美術館、Beacon

映像時間：1時間54分27秒

申込人数、再生回数：86名、203回

「杉浦非水 時代をひらくデザイン」展会期中に開催した講演会「杉浦非水が目指したもの：その生涯と仕事」（講師：長井健氏／愛媛県美術館専門学芸員）の全編字幕付き記録動画。コロナ禍による移動自粛や聞こえづらさ等による対面プログラムの参加のハードルを考慮し、期間限定で講演会のアーカイブ映像を動画共有プラットフォーム **YouTube** で希望者に限定公開した。



記録動画の一場面

視聴者の感想：

- ・オンラインでの講演会の記録動画は都合の良い時間に拝聴でき、また、個人的には対面より、集中できる点が良いと思います。[略] 諸事情で来館できない場合、大変よいシステムと思います。
- ・会場の雰囲気もわかるし、講師のかたの身振り、表情などからも内容が伝わってきやすいと感じました。

### ④事業成果の報告・共有

今年度事業について記録した20ページの冊子を作成（別添）。ICOM 日本委員会オンラインジャーナル、厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業のウェブサイト等でも事業について紹介する機会を得た。